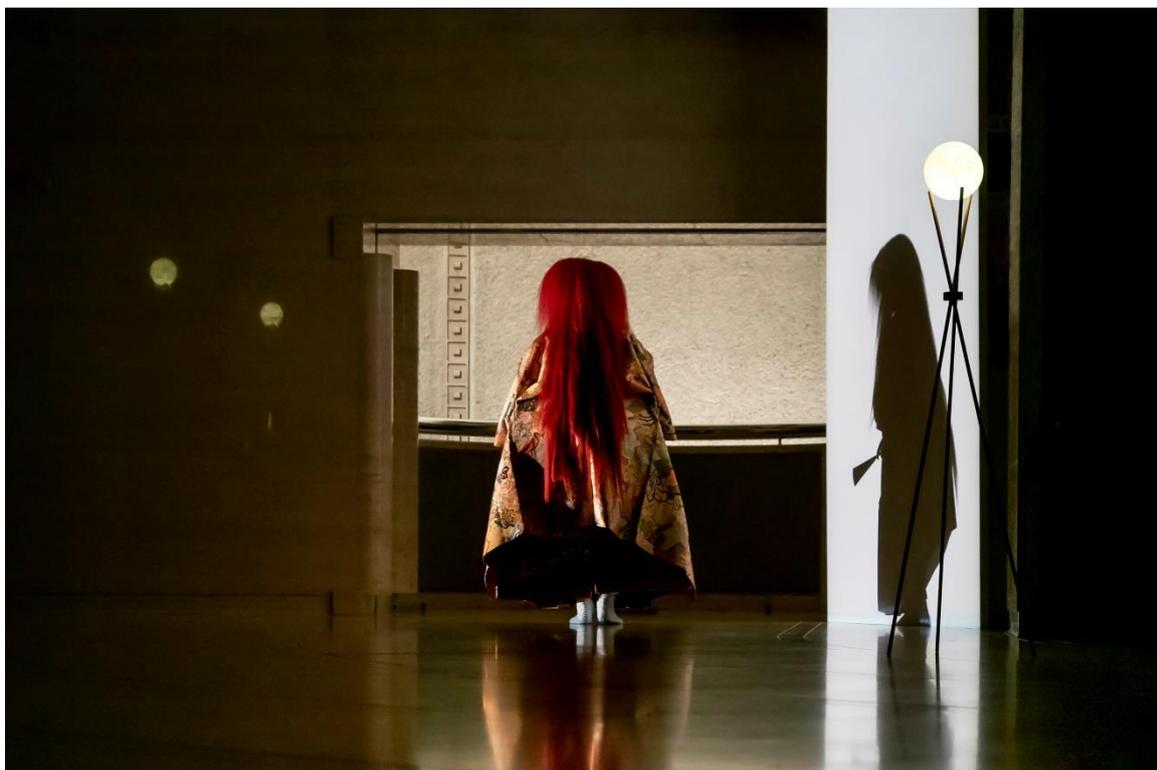


有料配信決定！

映像作品「夢の解剖——猩々乱」

Anatomy of the Dream: Shojo-Midare—A Film

出演=長山桂三 観世鍔之丞 大倉源次郎ほか 総合監修=ルカ・ヴェジェッティ プロデューサー=杉田協士 ディレクター=大川景子 撮影=飯岡幸子 録音=川上拓也 企画製作=世田谷美術館



①「夢の解剖——猩々乱」撮影：今井智己(以下同)

能の時空と、イタリア人演出家のまなざしが、美術館で出会った——

舞台は東京・世田谷美術館。エントランス・ホールを実験的な表現の場とするパフォーマンスシリーズを長年展開するこの館で、2021年10月、異色の国際コラボレーションが実現しました。日本文化に造詣の深いイタリア人振付家・演出家ルカ・ヴェジェッティが、彼のよき理解者である長山桂三、観世鍔之丞、大倉源次郎など第一級の能楽師たちと組み、能の演目「猩々乱(しょうじょうみだれ)」を上演したのです。

光と影による最小限で精緻な演出により、壮麗な空間は異次元の世界へと開かれ、能の強靱な創造性が新たなかたちで立ち現れました。

本作は、その稀有なパフォーマンスを映像によるもうひとつの作品として製作したものです。かねてより映像に深い関心を寄せていたヴェジェッティが、清澄かつ詩的な映像で国内外から注目される杉田協士や飯岡幸子らとともに、濃密な夢の世界へと静かに分け入ります。

猩々乱 猩々とは水中に棲む酒好きの妖精。満天の星の下、ほろ酔いで波や風と戯れ、無邪気に舞い遊ぶ。シテの優れた身体能力と技術を要するユニークな演目。

【有料配信】 ※11月下旬よりティザー映像を無料公開！

■2021年12月1日から2022年3月31日まで

■料金 1,000円(視聴サイトにて決済)

■視聴時間 約45分

■申込 世田谷美術館ウェブサイトより→



パフォーマンスと映像——「夢の解剖——猩々乱」をめぐって

塚田美紀(世田谷美術館学芸員、本企画担当)

パフォーマンスを記録する

パフォーマンスをとらえた映像は世に数多くあります。当館の場合、2000年代以降にシリーズとして開催してきた「トランス／エンタランス」などでは、ほぼ必ず本番の映像を撮影・編集し、アーカイブ資料として残しています。いずれもすぐれた撮影者による記録ですが、これまでは当館のアートライブラリーで公開するにとどまっていた。



②

コロナ禍のなかでの試み

転機は2020年夏に到来しました。コロナ禍によりやむなく実施した企画「作品のない展示室」にて、パフォーマンス事業のアーカイブ展示「建築と自然とパフォーマンス」が実現。映像に関しては、アーティストの試みを通して建築空間の魅力を強く体感できるものを1本選び、紹介しました。さらに、最終日に実施した関連パフォーマンス「明日の美術館をひらくために」についても映像を残し、開設まもない当館公式 YouTube にて同年10月から公開。一般の来場者を迎えての上演が叶わないという事情ゆえの映像制作とオンライン公開の試みでしたが、幸い、この1年で約2000人の視聴者を得ています。



③

パフォーマンスと映像の関係を再考する

こうした経験から浮かび上がった問いがあります。コロナ禍があろうがなかろうが、生の作品に触れられなかった、作品が立ち上がる現場に居合わせることのできなかった圧倒的多数の人々に対して、私たちは何を、どのように、映像で伝え得るのだろうか。パフォーマンスと映像の関係について、あらためて考える大きなきっかけとなりました。



④

それぞれ独自の「作品」として

トランス／エントランス特別篇「夢の解剖——猩々乱」は、2020年10月の開催を断念して1年延期としましたが、その間、主催者である当館のみならず、本作の原案・演出を手がけたルカ・ヴェジエッティ自身もまた、ほぼ同じ問いを反芻しながら過ごしていました。オンラインでの対話を何度も重ねた結果、パフォーマンスと映像、それぞれ独自の「作品」を送り出そうということになりました。

演出家ヴェジエッティの、映像への関心

長山桂三、観世鍊之丞、森常好、大倉源次郎といった若手からベテランまで第一級の能楽師が結集し、ヴェジエッティとともに生み出すパフォーマンスは、できる限り良いかたちで、ひとりでも多くの観客に届けねばなりません。その際、明確に「作品」としての映像をめざすことになったのは、ヴェジエッティが映像という表現形式にも深い関心を寄せてきた演出家だった、という素晴らしい偶然あつてのことです。



⑤

能楽師の息づかいにそっと呼応する、豊かな映像をめざして

パフォーマンスを映像作品にする、と一口にいっても、さまざまな考え方や方法があり得るでしょう。能という芸術に向きあい、かつ映像にするというときにヴェジエッティが重視したこと。それはまず撮影者自身が、一期一会の現場をつくる当事者としてそこに身を置くことであり、目の前で起こり続ける未知の出来事を、途切れなく長い呼吸でとらえる、という姿勢でした。たくさんカメラを設置してあれこれの角度から撮る必要はなく、演者の息づかいにそっと呼応しながら場を見つめる少数の個人の視点が、豊かな映像をもたらすとも考えていました。

『春原さんのうた』で注目の映画監督、杉田協士がプロデューサーに

こうした方針をよく理解し、映像プロデューサーとして今回のプロジェクトに関わったのが、映画監督の杉田協士です。清澄で詩的な作品世界で知られ、長編最新作『春原さんのうた』(2021年)がマルセイユ国際映画祭で3冠受賞を果たすなど世界的な注目を集めている杉田は、当館との縁が深い監督です。



⑥

長年にわたり映画ワークショップの講師を務め、「明日の美術館をひらくために」の撮影・編集も担当。ヴェジエッティによる当館での最初のパフォーマンス作品「風が吹くかぎりずっと——ブルーノ・ムナーリのために」(2018年)の記録も手がけており、以来、ヴェジエッティも大きな信頼を寄せています。「作品のない展示室」で上映したのも、実は「風が吹くかぎりずっと」でした。



⑦

撮影は『偶然と想像』(濱口竜介監督)の飯岡幸子

杉田が結成した映像チームには、飯岡幸子が撮影で参加。飯岡も当館との関わりが深く、撮影監督としては『春原さんのうた』や、濱口竜介監督『偶然と想像』(2021年)などで活躍しています。「夢の解剖」の本番では驚異的な集中力により、美しく強度のあるイメージを撮り収めました。



⑧

長く深い余韻が残る、濃密な世界

このほか、監督・編集の大川景子、録音の川上拓也など実力者揃いのチームは、総合監修のヴェジエッティとの細やかなやりとりを重ね、濃密な映像世界を実現。長く深い余韻が残る作品となりました。

12月1日から配信予定の「夢の解剖——猩々乱」に、どうぞご期待ください。



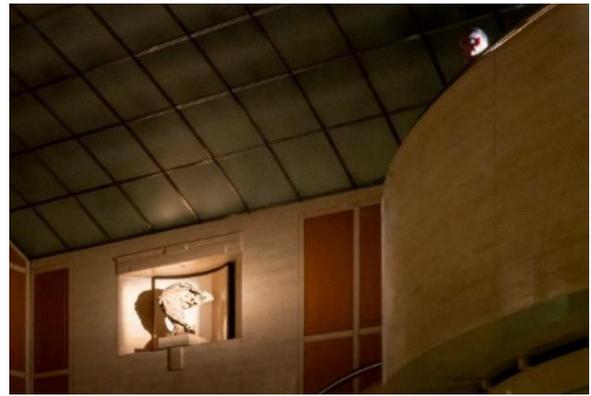
⑨

〈公演レビュー〉

「夢の解剖——猩々乱」公演(2021年10月5日・6日)は、コンテンポラリーダンス、能、オペラなど多様な関心を持つ方々に鑑賞いただき、大きな驚きと賞賛の声をいただいています。公演のようすは「能楽マガジン Noh +」などでも紹介されました。

「能楽マガジン Noh +」レビュー記事↓

<https://qr.paps.jp/LntQY>



⑩

関連映画情報 杉田監督の『春原さんのうた』には、当館の「明日の美術館をひらくために」のワンシーンも登場します。2022年1月8日からポレポレ東中野などで公開。『春原さんのうた』公式サイト <https://haruharasannouta.com>

【総合監修】ルカ・ヴェジッティ Luca Veggetti 1990年より振付家・演出家として活動。作品はグッゲンハイム美術館パフォーマンスシリーズ「Works & Process」、マーサ・グラハム・ダンスカンパニー、シテ・ドウ・ラ・ミュージック等で制作・上演され、高い評価を得てきた。近年の仕事に、原案・演出・振付を手がけた「左右左」(横浜能楽堂とジャパン・ソサエティー〈ニューヨーク〉の共同制作、2017)、ジェローム・ロビンス作品の再読・新演出「Watermill」(ブルックリン音楽アカデミー、2018)、サルヴァトーレ・シャッリーノ作曲オペラ「Infinito Nero」(ボローニャ、2021)など。美術館のための作品に、パフォーマンス/ビデオインスタレーション「Scenario」(MART、ロヴェレート、2016)、「風が吹く限りずっと——ブルーノ・ムナーリのために」(世田谷美術館、2018)など。

【プロデューサー】杉田協士 Sugita Kyoshi 1977年東京生まれ。2011年に長編映画『ひとつの歌』でデビュー。4首の短歌を原作に製作された2017年の第二作『ひかりの歌』が主要各紙やロコミなどの評判により全国公開へと広がる。東直子の短歌を原作とした第三作『春原さんのうた』が第32回マルセイユ国際映画祭にてグランプリ、俳優賞、観客賞を受賞。その後第69回サン・セバスティアン国際映画祭、第59回ニューヨーク映画祭、第26回釜山国際映画祭など多数の映画祭に出品。2022年1月より劇場公開予定。

【撮影】飯岡幸子 Iioka Yukiko 映像作家。撮影監督。映画美学校にて映画監督の佐藤真氏に師事、映像制作を始める。東京藝術大学大学院映像研究科映画専攻修了。監督作品に、「オイディプス王 / ク・ナウカ」(2000)、「ヒノサト」(2002)。撮影作品に、杉田協士監督『春原さんのうた』(2021)、『ひかりの歌』(2017)、濱口竜介監督『偶然と想像』(2021)など。

【出演】

シテ 長山桂三 Nagayama Keizo 1976年、観世流シテ方 故 長山禮三郎の次男として生まれ、八世観世鏡之丞(人間国宝)、九世観世鏡之丞、および父に師事。桂諷会を主宰し能楽の普及に積極的に努める、新進気鋭の若手能楽師。重要無形文化財総合指定保持者。

小鼓 大倉源次郎 Okura Genjiro 1957年、大倉流十五世宗家大倉長十郎の次男として生まれ、85年、能楽小鼓方大倉流十六世宗家継承。誰もが能に気軽に会えるよう「能楽堂を出た能」を多数プロデュース。新著に『能から紐解く日本史』(扶桑社)。重要無形文化財各個認定保持者(人間国宝)。

地謡 観世鏡之丞 Kanze Tetsunojo 1956年、観世流シテ方 八世観世鏡之丞(人間国宝)の長男として生まれ、伯父の観世寿夫および父に師事。パリ・オペラ座 350周年作品のイェイツ原作「鷹の井戸」に出演するなど、古典を超えた世界でも幅広く活躍。重要無形文化財総合指定保持者。



⑪

【作品情報】

「夢の解剖——猩々乱」

原案・演出 ルカ・ヴェジェッティ

演目 能「猩々乱」

出演 シテ 長山桂三 ワキ 森常好 笛 藤田貴寛 小鼓 大倉源次郎
大鼓 大倉慶乃助 太鼓 林雄一郎 地謡 観世鏡之丞 後見 鶴澤光

上演日 2021年10月5日・6日

会場 世田谷美術館エントランス・ホール

照明美術デザイン 吉田萌

照明 富山貴之

舞台進行 佐藤深雪

舞台進行補助 河内崇

記録写真 今井智己

企画制作 塚田美紀(世田谷美術館)

制作補助 吉田絵美 鈴木照葉(世田谷美術館)

制作協力 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

協力 公益社団法人鏡仙会

後援 イタリア文化会館

主催 世田谷美術館(公益財団法人せたがや文化財団)

[映像]

総合監修 ルカ・ヴェジェッティ

プロデューサー 杉田協士

ディレクター 大川景子

撮影 飯岡幸子 壺井濯 柘下仁美

録音 川上拓也

編集 大川景子

グレーディング 田巻源太

フライヤーデザイン 武田厚志(SOUVENIR DESIGN INC.)

企画製作 世田谷美術館

〒157-0075 東京都世田谷区砧公園 1-2

tel: 03-3415-6011(代)

※本企画に関するお問合せは学芸部・塚田美紀まで



ARTS for the future! 本事業は文化庁「ARTS for the future!」補助対象事業です

